

放課後レクイエム

真名事件調査記録

鹿屋めじろ

Mejiro Kanoya

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画
オンダカツキ

目次

5	4	3	2	1	0
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
141	125	87	55	18	7

あとがき	11	10	9	8	7	6
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
242	238	208	201	190	165	154

放課後レクイエム

真名事件調査記録

0

道には街灯の一つもなく、暗い。山道を歩く時は歩きやすい靴でないと、という程度の分別はあったけれどヒールの低い靴なんて、今履いているムートンブーツくらいしか持っていない。このイベントが冬に行われていて本当によかった。この間、スエード部分の端が少し剥がれてしまったのが残念だけど、足は怪我もなく無事だった。防御力も高いみたいだ。「……つーか、マジ、行くまでにバテるつーか」

しろやまじょうせき
城山城跡へ続く山道を登りながら、檜山ほのかは息を切らしつつぼやいていた。最低限の整備はされているが舗装されていないため、雑草や小石で足元は悪い。その上向かい風が強いせいで、せっかく綺麗に巻いた髪がなびいて、唇に貼りついてしま

っている。グロスなんて塗るんじゃないかった。夜だから、気温も下がっていて寒い。テンションは自然と下がる。

「これさあ、もう会場からして女に不利じゃん。こっちはか弱いんだから考えてよって感じ。マジむかつく」

イライラと、檜山は足元の小石を蹴った。今日の対戦相手は、土門とかいう男だ。学校が違うからよく知らないけど柔道部のキャプテンをしていて、強くて有名ならしい。多分、柔道部の男は毎日走りこみだのなんだので鍛えていて、こんな山道へつちやらだと思う。フエアじゃない。

はあ、と大きなため息をついて立ち止まった。それからもう一度、気合いを入れて、大股で一歩を踏み出した。

分かってはいるのだ。文句を言っても仕方ない。あの社が城山城跡にある以上、多少しんどくても、歩いて山を登るしかない。

山道がかくつと九十度左に曲がる。このカーブが来たらあと少し。踵かかとに力をこめると、じやりつと小石が鳴った。ジーンズの固い布地と太ももの皮膚ひふが擦すれて、なんだか足がむず痒かゆいけど、我慢する。

カーブを越えてしばらく歩いて、坂道を登り切った瞬間、唐突に視界がひらけた。

城山城跡。

城跡と言うだけあって、小さな石積みいしづみの跡あとはある。けれど、別に天守閣があるわけでもやぐらが立っているわけでもない。こんな場所を見て楽しいのは歴史マニアくらいのもんだろう。昼間は健康のために散歩している老人がいることもあるが、夜ともなれば人の気配はない。

だからこそ、好都合。

登山のせいで乱れた息を整えながら、檜山は空を見上げた。山の上だと星がよく見える。欠けた月が浮かんでいて、社はまだ出現していない。土門とかいう男も、まだ到着していなかった。

その時だった。

「待ちくたびれた」

少しかすれた、ハスキーな女の声でした。広場を囲んでいる森の木の本にもたれかかって、女が一人立っている。

「……なーんだ、火ひノ宮みや。今日の立会人、あんただつけ？」

檜山の問いかけに、女……火ノ宮明日香あすかが静かに頷うなずいた。遠目にも、すつきり通った鼻梁びりょうの高さが分かる。ノーマイクのはずなのに、肌は白く透き通るようだ。見慣れた顔だが相変わらず、スッピンで美人なのが腹立たしい。

「待ちくたびれたつつつてもさあ。時間、まだ余裕でしょ？」

「檜山はいつも、早めに来るって聞いてたから」

「何それ。あたしと話したかったってこと？」

「違うわよ。たまたま早く来ただけ。そしたら、いるかと思つてたのにいないんだもの」

暇だったのよという火ノ宮に、ふーんと檜山は気のない返事をする。どうせ家にいたくなかったのだらう。火ノ宮との付き合いは長く、お互いのことは、それなりによく知っている。彼女の家庭が少しばかり複雑なことも。

腕時計を見ると、まだ十時半だ。開始までには時間があるし、暇潰しに火ノ宮と話すのもいい。

ぱたぱたと足音を立てて、檜山は火ノ宮に駆け寄った。

「つーか火ノ宮、めっちゃ薄着じゃん？ 寒くない？」

薄いピンクのダウンジャケットの袖口をぎゅゅと握って、檜山は尋ねた。火ノ宮は、Vネックのセーターにジーンズ。その上にトレンチコートという出で立ちだ。対する檜山は、ダウンジャケットの下は厚めのセーター。下はジーンズとムートンブーツ。髪の毛は耳が寒くないようにふわふわに巻いて下ろしているし、その上にはニット帽までかぶっている。

もうすぐ十二月になるし、それでなくても夜には気温が下がる。いくらなんでも火ノ宮は薄着しすぎだ。けれど火ノ宮は、檜山を冷たく一瞥した。

「そっちこそ……厚着しすぎでしょ。今から戦うって分かってる？」

冷たい視線にも負けず、自信満々に頷く檜山。

「わーってるよ。今日の相手って土門でしょ？ 石とか当たったら痛いじゃん。だから厚着で防御！ ってねー」

「ああ、なるほどね。ふーん、一応、考えてはいるのね」

さも感心したような声で言うと、火ノ宮は目を細めて、意地悪そうに笑った。

「防御もいいけど、石を当てられてダウンの中身が飛び散らないように、気をつけた方がいいんじゃない？」

対する檜山も、グロスの光る唇を吊り上げるようにして笑う。

「ばあーか。そんなドジ踏むはずないでしょお？
次の試合だってこの服で来るんだから、大事に着るよ」

「あら、次も私が立会人よ」

「奇遇だよねー。確か、夢殿ゆめどのとだっけか。連戦なんだよねえ、今回」

「だるーい、と大きく伸びをする檜山に、火ノ宮の笑みが深くなる。」

「連戦？ 連戦になるかなんて、分からないでしょう」

その言葉に、前のめりにしていた伸びをやめて、檜山は傲然うしろぜんと顔を上げた。茶色の巻き髪がふわふわと揺れる。

「なるよ。あつたりまえじゃん？」

「言い切るわね」

「だってあたし、勝つからね」

びゅう、と強い風が吹いた。広場を囲む木々がざわざわと揺れて、少女二人の髪がなびく。束ねた髪

を押さえながら、火ノ宮が檜山を見つめた。

「……土門つて一応、名門よ。返り風情かえふぜいが、侮らあなどない方がいいんじゃない？」

返りという言葉に、ぴくりと檜山の顔が歪ゆがむ。大股で火ノ宮に歩み寄ると、開いた胸元に指を突きつけた。

「火ノ宮あ、やつばあんた薄着しすぎ。特に、今日なんか風が強いんだからさあ、返り、風情の炎が飛んで火傷やけどしないように、気をつけた方がいいんじゃないのお？」

「凄い自信ね。私に、あんたの炎が届くと思ってるの？」

「さつすが名門は言うことが違うよねー。『土門つて一応、名門よ？』だもんね。一応だつてさ。じゃああんたは？ つて感じ」

「言わないと分からないの？ 知ってるくせに」

火ノ宮の口調は揺るがない。けつ、と顔をしかめて、檜山は火ノ宮から視線を

逸らした。真顔で言いやがって。何様のつもりだ。

確かに火ノ宮は名門だ。それくらい知っている。

真名統廃令を真正面から乗り越えた、正真正銘の名門の家系。誇りを持つのも分かる。この程度のやり取り、二人の間ではよくあることだ。それでも、むかつくものはむかつく。

ぶん、と、羽虫が飛ぶような音がした。

「……来た」

二人は同時に空を見上げた。いつの間にか広場の上空に、みすばらしい小屋が一軒、浮いている。

今にも朽ち果てそうな木の小屋は、陰鬱な雰囲気をつけて、周りの空を、空間までも灰色に染め上げているようだ。

社。

この小屋の出現が、戦いのはじまりの合図。

「遅くなった」

男の声がした。土門が到着したらしい。檜山は声の方に向くと、言う。

「ホント、おっそい。試合放棄かと思つた」

「冗談じゃない」

言葉少なに返すと、土門は社の下を通つて檜山たちに近いてくる。下を通る時に、少しだけ社を振り仰いだ。檜山も以前、同じことをしたから知っている。見上げてでも灰色の底が見えるだけで、面白いことは何もない。けれど宙に浮いている小屋という非日常が物珍しくて、ついつい何度でも、社を振り仰いでしまう。

非日常に、胸がときめく。

「さーて、やりますか」

言うのと、檜山は少しだけ足を開いた。大地をしっかり踏みしめる体勢。

体の正面、土門にまっすぐのひらに向けて両手を掲げる。

「……っ」

息を吸う。力をためる。てのひらに、自分の体中をめぐる血液を、全て全て全て、集めていくような

イメージ。

熱を、ためて、

「そこで見てろよ、火ノ宮」

自分を馬鹿にした火ノ宮に、飛び火したって構わない気持ち。

ぽつ、と檜山の手の前に、炎が出現する。対する土門もこぶしを握った。

させない。土門が動くより先に、檜山は腕を振り抜いた。出現した炎が土門に向かう。自分が放った炎を追うように走り出す。吹きつける風が頬を冷やすけれど、もうそんなことはどうでもいい。

土門が慌てて、こぶしを大地に叩きつけた。ごつという鈍い音とともに激しく土埃が舞い上がり、炎が掻き消される。けれど別に構わない。今のはほんの挨拶代わり。

檜山の顔には、自然と笑みが浮かんでいた。

「そうこなくっちゃ！ さあ、戦おうじゃない！」
熱をためて、もう一発。

熱風が巻き起こる。

炎が――



「火傷？」

突然やって来た報告に、パソコンのキーボードを叩く手を止めて、無名壮源は思わず顔を歪めた。事務椅子をぐるりと回して、背後に立っている渡部に向き直る。

「え、火傷ってなんだ。酷いのか？」

「そりゃあお前、酷いからわざわざここに報告が来てるんでしようが」

しつかりしてくれよと、渡部が長い髪をもしやもしやと掻きながら言った。

「あー。まあ、そりゃそうだよな。で、次の任務はその火傷？」

「そうそう。ご明察」

言いながら、今度は胸元をぼりぼりと掻く。

浮き出た鎖骨が見えるほど首回りの伸びきったTシャツにゆるいジーンズ。あげくに足元はサンダルという出で立ちでそんな仕事をされると、見ている方までだるくなつて、はつきり言つて、仕事を妨害されている気分になる。

しかも彼は、見た目もオフィスに相応しくない。いい歳をして肩の下まで伸ばした天然パーマの茶色の髪と、細長い体型が彫りの深い顔立ちにマッチして、まるで七〇年代のフォークシンガーのようなのだ。

真つ当なサラリーマンでないことは一目で伝わるが、能力さえあれば、怪しい見た目もだるい態度もまとめて許容するのが、壮源たちが所属する組合の懐の深さではある。

まあ、そんなことを考えている壮源も、赤い薔薇の花がプリントされたシャツに、前髪が鬱陶しいからとオールバックにまとめた髪型、さらに切れ長の目の端正な顔立ちが悪い意味でマッチして、真つ当

な社会人には見られたことがない。渡部にはよく、チンピラくさいとからかわれる。特に体が大きいわけではないのだが、眼光鋭く威圧感があるらしい。

「さて」

小脇に抱えていた書類を目の前に持ち上げると、相変わらずのだるそうな声で、渡部は報告書を読みはじめた。

「えーと、なんだ。今日の話か。深夜一時二十三分、救急病院に搬送された患者がいて、そいつが全身に火傷、だつてさ。名前は土門御門。御大層な名前だねえ。門が多い」

「あー、土門か。一応、名門の真名だな」

貸せよと壮源は手を差し出した。渡部に任せていたら、いつまでたつても話が進まない。頭はいいくせに、要領よく話そうという気持ちを感じられないのだ。

最初から自分で読めよな、と理不尽なことを言いながら、渡部が壮源にレポートを手渡した。

ざっと目を通したところ、大きな事件は一つ。全身に火傷を負った土門御門という名の高校生が、深夜に救急病院に搬送された。不審な点は火傷を負った状況を、土門が明らかな嘘うそで隠そうとしていること。

現場は狭山さやまという都市である。救急隊が到着した時、土門は城山城跡という遺構がある山の登り口で倒れていた。通報者は女の声だったというが現場にその姿はなく、土門も、そんな女は知らないと言う。「……狭山では最近、真名保持者の外科受診数が大幅に増加しているので注意が必要、か」

レポートを読み終わって、ん、と渡部に突き返した。要約すると、土門の火傷の原因は何か、その原因と外科受診率の上昇要因に関連があるのか否かを調べ、危険が起ころうとしているのなら阻止そししろと、それだけの話らしい。ささやかな任務だ。何故なぜこの

程度の話が壮源にまわってきたのかよく分からない。まあ、任務とあればやるだけだが。

「いつから？」

壮源の端的な質問に、渡部が「ん」とてのひらを広げる。げえつ、と思わず悲鳴が漏もれた。

「五日って急すぎだろ。俺、前の仕事の始末もまだ終わってねえんだけど」

「たらたら報告書作ってんのが悪いんでしょ。遅いんだよ、お前は、仕事が」

「苦手なんだよ、文章書くのは……」

はあ、とため息をつく壮源に追い打ちをかけるように、にやりと笑って渡部が言った。

「文章も書けない壮源君は、たまには勉強すればいいって上の温情らしいぜ。次の仕事ではなんと、転入先の高校を用意してくれるってよ」

はあ!! と壮源は、腰を浮かせて抗議の声を上げる。

「え、ちょ、高校って……俺、中学校もろくに通っ

てねーぞ！」

「正気か?! とわめく壮源に、渡部は肩にかけていた大きなデイパックから本を何冊か取り出した。ほい、っと壮源に向かって投げる。受け取らせようと、いう気など欠片かけらも感じられない大ざっぱさで投げつけられた本たちが、壮源の体に当たってバサバサと床に落ちた。

「お前……いい加減にしろよ……」

あまりの仕打ちに怒りの声もかすれる。何なんだよ、と床に目を向けた壮源は、そのままがつくり肩を落とした。

「ま、そういうわけさ」

渡部の声音は、腹立たしいほど他人事ひとことだ。

「急増してるつつー外科受診者だけど、なんと九割学生らしいわ。そんなわけで、学校に潜りもぐこんでそれらしい話がないか調べるのが早いんじゃないかって事前調査課の判断な。んで、五日後が編入試験。上層部の旧知がいる学校だから、編入手続きは

楽らしいけど……あんま変なの入れると外聞もあるだろ? 一応試験は受けてくれ、だよ。教科は三科目。受かったら準備期間挟んで、狭山に向かって、そのまま仕事がスタート。ちなみに編入学年は三年。年齢的にギリのラインだ」

床に落ちたのは、もう二度と見たくないと思つていた、国語と英語と数学の参考書だ。

「ま、頑張つて勉強して下さいよ。無名壮源は任務に失敗したことがない優秀なフォースだつて評判でしょ。評判落としちゃダメつしょ?」

渡部が言う仕事には、英語や国語の勉強も含まれるのだからかと、壮源は俯うつむいたままため息をつく。

今の気持ちこそ率直に一言でまとめると、

「……だりい」

「まあまあ。優秀な組合人は、仕事に対してだるとか言わないもんよ? そーいやお前、子どもの頃に狭山に住んでたつて言つてなかつたか」

渡部の言葉に、反射的に壮源は顔を上げた。面倒

くさをを全力で表現していた顔に、少しだけ笑顔が戻る。

「あ、そうそう。懐かしいな。小学校に入るちよつと前に……二ヶ月くらいはいたのか。隣に住んでたガキと仲よかつたんだ」

「ガキってなあ……その頃はお前もガキだろ？」

「まあな」

思い出を辿る時はついつい、今の自分の視線で思いついてしまう。記憶の中で、仲のよかつた少年が棒で青虫をつついたり蟻の巣穴に水を注いだりしている。思い返してみれば、ろくな遊びをしなかつた。「狭山ねえ。……例のよみがえり事件よりは前、だよな？ 当然」

渡部の言葉に、ちつ、と思わず舌打ちをした。せつかく楽しい思い出に浸っていたのに、余計な話をしやがって。

よみがえり。

狭山という地名が出るたびに、セットで語られる

事件だ。

「ああ。あの時は、俺はアメリカにいた。詳しいことは知らねえよ」

不機嫌丸出しで、返事だけはしてやった。狭山に住んでいたという話をするたび、うんざりするほど繰り返された会話だ。小さな頃に少し住んでいたというだけで、いちいち話を持ち出されてはかなわない。

真名の管理・統括・監視、そして真名保持者の快適な生活の保持……それらを目的に設立された「組合」にとっては大事件であるのだろうか、何度も尋ねられるといい加減に鬱陶しい。

「あいつ元氣かなあ。会えたら話くらいはしたい気もするな」

虫取り網を持って、神社中のセミを捕まえてもらった遠い夏の日。二人が遊んだ神社は、今もまだ残っているのだろうか。

「ま、今でも狭山に住んでるかどうかも分かんねえ

けど」

「はは、と壮源は笑った。事件の後、狭山からの転居者が急増したという話を聞いたことがある。会えるかどうか分からない旧友のことよりも、今は……」

「じゃあねえ。勉強すっか」

床に散らばったままの参考書を拾うために、壮源は立ち上がった。渡部がむふん、という音を立てて、鼻から息を吐く。

「せめてもの情けだ。こないだの報告書は作ってやろう」

「あ、マジ？」

「思いもかけない温情に、壮源は顔を輝かせた。鷹揚な仕草で、渡部は頷いてみせる。

「俺としても、パートナーの頭が悪すぎて、任務スタートにもいたれませんでしたっていう状況はちょっとねえ。情けないから避けたいっていうか」

「明らかに壮源を馬鹿にしている言葉に、ちえ、と唇をとがらせる。

「嫌味な奴だな。勉強するよ、真面目に、な」

「そうしてくれよ」

返事をしながら渡部は既に、壮源のパソコンに向かってキーボードを打ちはじめている。カタカタカタカタ、と見事なブラインドタッチだ。体力はないけれど、書類仕事には壮源より向いている。

組合も、人選は考えているはずだ。だからきつと、今回の任務の割り振りにもそれなりの理由があるのだろう。たとえば、高校に潜入できる年齢のフォー스가他にいないとか。まあ、考えられる理由なんてそれしかないわけだが。

憂鬱になつてきた。慌てて壮源は頭を振って、ブルーな気分を吹き飛ばす。

やるしかない。やるしかないのだ。それが仕事だ。サラリーマンの宿命だ。

無名壮源十八歳。組合最年少、実地調査事務局実動調査課、通称「フォース」所属。たまに気分が乗らない時もあるが、基本的には、仕事に生きる男である。

1

アメリカで暮らしていた時期があるので、英語はとりあえず、書かれています英文の意味は分かった。

しかし前置詞だのなんだのと、質問の中によく分からない単語があった。国語はとも苦手だ。作者の心情だの登場人物の気持ちだの分かるわけがない。

数学は、昔からなんとなくできるので苦手ではない。しかし公式を使って解けると、覚えていないので分からない。中学校もサボるばかりでろくに通っていないかったのだ。仕方ないと言い訳しつつ、分からない部分は無視してとにかく解いた。

で、今。壮源はこんなところに立っているわけだから、ギリギリ最底辺だったとしても、高校に潜りこめる程度の成績はおさめたのだろう。

教壇きょうだんの上から久々の教室を眺めながら、壮源は自分の紹介をしている、担任教師の言葉を聞いていた。

クラスの担任は、戸村恵子とむらけいこという女性だった。職員室に行つて転校生ですと告げると、まず戸村の元に案内された。ショートカットの、まだ若い教師だ。落ち着いた生真面目そうな喋り方しゃべりかたを聞いていると、あまり自分とは相性がよくないのではないか、と思つてしまふが、どうせ短い付き合いなのだから、その間を適当にやりすごせればいいだろう。

任務が終わればすぐに、適当な理由をつけて、高校を退学することになる。

「挨拶をして下さいね」

促うながされて、教壇の上で胸を張つた。

「無名壮源です。家の都合で変な時期に転校することになったから、卒業までの短い間になると思いますが……」

白々しい。よく言うぜ。

心の中で自分にツツコミを入れる後ろで、戸村教師が壮源の名前をデカデカと黒板に書いている。

「……なるべくなら楽しく、いい感じにやっていきたいと思ってるんで、よろしくお願いします」

一瞬教室がざわめいた後、ぱちぱちとまばらな拍手が飛んだ。教壇の上からだ、クラス全体がよく見える。進学校とは聞いていたが、髪を染めている者すらいない。自由人だらけの組合ですごしている身としては新鮮な光景だ。

(あれ？ あいつって……)

クラスの真ん中に、知っている顔を見つけた。

こだわりもなく適当に伸ばした感じの、男子にしては長めの髪型だが、前髪がすっきりと切られているので容貌ようぼうははっきり分かる。少し垂れた目の形に面影おもかげがあった。とがり気味の鼻の形も知っているし、細身の体型も昔のままだ。昔から小柄だったが、身長は今も、それほど伸びてはなさそうだ。

狭山に住んでいた短い夏、裏庭で一緒に芋虫いもむしを棒

でつついた相手。

名前は確か……

「無名くんの席は、一番後ろがあいてるから……」

戸村が指さした先に、無人の机がある。

「ん、了解。了解です」

戸村の言葉を最後まで聞かず、指示された席に向かう。空席は窓側の一番端の列だったが、あえて見覚えのある少年の横を通った。近づくにつれて、間違いないよなあ、と確信が深まる。昔頃から、どっちかっていうと女顔だったし……と考え続けて、俯きがちな彼の横を通ろうとした時に、やっと、

「あ、向井。向井円！」

彼の名前を思い出した。

「へ？」

間の抜けた声を上げて、記憶の彼、向井円が壮源を見上げた。ざわざわとクラスにざわめきが広がっていき、壮源は構わず、机にどん！ と両手をつけて少年に迫る。

「な、向井。向井円だよな？ 覚えてねえかなあ。

俺だよ、俺。お前の家の隣に住んでた無名壮源。よく一緒に遊んだよな。芋虫つついたり。まあ俺、二ヶ月くらいしかいなかったけど、仲良かったしさ。忘れられてたらちよっと悲しいっつーか……」

「ち、ちよ、ちよっと待って」

待って、と向井がかほそい声で言った。両手を上げて、迫る壮源の顔をブロックしている。

「なんで向井？ 僕、向井だったことはないはずなんだけど」

は？ と壮源は首を傾げた。向井だったことはいはずなんだけど。なんだかややこしい言い方だ。

国語が苦手な身にはつらい。

しばらく考えて、ようやく結論に辿りつく。

「じゃあ、人違い？」

「……うん、多分」

少年が自信なさそうに、小さく頷いた。壮源は近づけていた顔を離して、机にしていた両手も外し

て、

「じゃ、お前、だれ？」

尋ねた。少年が申し訳なさそうに首をすくめる。

それからゆっくり、噛みしめるような口調で言った。

「夢殿、円だよ。よろしく、無名くん」

「あ、よろしく……」

まどか。中性的な容貌の彼には似合うが、男にしては珍しい名前だと思う。思い出の少年と、名字は違えど名前は同じ。顔にも面影はばっちりあるし、人違いだとは思えない。

「夢殿か……ん、よろしくな」

ひとまず、にっこり笑いかけた。それから、念のためにと思っつけ加えてみる。

「夢殿さあ、昔、向井って名字だったことは？」

壮源の言葉に、夢殿は再び俯いた。長めの黒髪が横顔を覆い隠す。

「ないよ」

きつぱりと、拒絶するような声だった。これ以上

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。